

【書評】

岩田 一彦 編著 『小学校社会科の授業設計』（東京書籍、1991）

金子 邦 秀（同志社大学文学部）

「授業研究は理論の妥当性を検討することが第一の目的である」と、編著者の岩田一彦氏は主張する。これまで、熱心な授業研究が行なわれながら、感想的発言が飛びかって終わってしまう社会科の授業研究の現状の原因は、授業設計者がその授業の基盤とした理論を明示していないところにある。そこで、本書において、岩田氏らは、学習指導案に直結した明示的理論を提示し、併せてその理論に基づいて構築される授業がどんなものになるかを小学校社会科の事例で具体的に示そうとした。そのことによって、理論を反証可能性のある形で提唱せんと試みている。

そこで、まず、理論編の検討をしてみたい。6つの節からなる理論編では、「(1)授業設計の重要性」において、本書の一番基礎となる、授業設計の3原理が述べられている。これは、岩田社会科理論の骨子であって、⑦社会科は社会諸科学の成果と結合しなければならない、⑧社会科は知識分析論を組み込みいかなる質の知識を与えるのか明らかにしなければならない、⑨社会科はその知識が子どものものとして組み込まれていく認識過程と問いの構造を明確にしておく必要がある、という点である。学習指導案は、それが研究仮説として提示される時には、この3つの要件を満たしていることを示しておく必要があるというのである。

特に本書では、認識過程と問いの構造についてさらにその理論の精緻化が図られている。そこでは、「分かる」過程をいかしていくことが授業過程の基本であるとして、Ⅰ. 情報収集の段階、Ⅱ. 分類の段階、Ⅲ. 比較の段階、Ⅳ. なぜ疑問—仮説設定の段階、Ⅴ. 関係考察—検証の段階、からその過程が成り立っているのではないかということを示している。また、問い・知識の分類として、大きくは、事実関係の知識と価値関係の知識とに分けられるとしている。そしてこの認識過程と問い・知識の分類との関係から、社会科の基本的学習過程としては、概念探求型（8段階）と価値分析型（4段階）との2つのものを提唱している。

これをうけた、授業実践編は、岩田氏の理論を、岩田氏の薫陶をうけた現職教師が、その授業設計の手の

内を明示的に紹介し、その実践結果を報告している。即ち、第Ⅱ章「授業設計の実際」の中で取り上げられている授業の例は、授業設計理論をうけて、「社会諸科学の成果を組み込んだ授業」、「知識分析を生かした授業」、「子どもの問いの過程を重視した授業」、「単元計画に明確に位置づいた授業」、「教材目標・構造を明確にした授業」、「問題をとらえさせる過程に注目した授業」、「予想から仮説への過程に注目した授業」、「仮説を確かめる過程に注目した授業」、「『まとめ』の過程に注目した授業」、そして最後に「価値分析を組み込んだ授業」と、その1つ1つが、その理論の構成要素を丹念に検証しようとするものになっている。もっとも、それぞれの授業は、小学校第3学年から第6学年にわたっており、農業、工業、漁業、身近な地域、そして歴史と、その単元の領域も多様性をもたせるように配慮がなされている。それぞれの授業設計例には、理論との対応が明記されており、授業設計の実際を見た上で、もう一度、理論編に立ち戻ることができるよう工夫がなされている。

以上のような内容をもつ本書の意義は次の諸点に要約されるであろう。即ち、⑦社会科の授業設計における青写真を、社会科学論、知識論、認識論の各観点から示し、それらと学習指導案との対応を明確にしたこと、⑧それぞれの理論の構成要素に焦点化した学習指導案を示すことによって、ある一定の学習への焦点化とそれに基づく授業を大きな探求過程へと位置づけたこと、⑨そのことによって、様々な授業設計のバリエーションの可能性を示したこと、⑩事例としては1つにとどまったが、価値探求型の授業設計のプランを示したこと、⑪小学校各学年での事例に理論をあてはめることによって、小学校社会科の授業設計理論としての有効性を主張したこと、などである。

最後に付言しておきたいことがある。本書で示された岩田社会科理論は、まさに「理論の妥当性を検討すること」を、理論研究者にも実践家にも提起し、自らをその吟味の俎上に置くことを求めている。本書を手掛がかりに研究者も実践家も共に研究を深めたい。